

国際化の中の日本文化と日本人

祖父江孝男



一、国際化を妨げるもの——閉鎖性

日本文化や日本人の持つ特色については、今までに多くの人々によって論ぜられ、あるいは集団主義、あるいは「甘え」の存在等々、いろいろの点が指摘されてきたのだが、私がここでまずとりあげておきたいのは、「タテ社会性」という特徴についてである。このことばは文化人類学者の中根千枝によって提唱されたもので、「上下の関係」を重んずるという特色だ。欧米においても上下の関係はいくらでも存在しているわけなのだが、欧米

においては契約によって定められた目上の者の権限に従うものであるのに対し、日本では目上の者の持つ全人格に従うのであり、そこに大きな違いがある。

そこで次に考えねばならないのは、日本人におけるヨコの関係であるが、私は便宜上、これを「ヨコのむすびつき関係」と「ヨコのひろがり関係」のふたつに分けて考えることにしている。ここで「ヨコのむすびつき関係」とは、お互いに知り合った者どうしの関係、つまり、知人、友人、仲間どうしの関係をさし、もうひとつの「ヨコのひろがり関係」とはお互いに知り合っていない者

どうし、つまり大衆、公衆の一員どうし、市民社会のなかにおける市民どうしの関係をさす。

このように二つを分けてみると、日本においては前者の「むすびつき関係」のほうは、タテの関係と同じように極めて強いのにに対し、後者の「ひろがり関係」のほうは欧米に比べて非常に弱いことが結論できそうに思う。十年、二十年前と比べれば、明らかに少しずつ育ちつつあるとはいえ、日本における市民意識や市民運動は、欧米に比べてまだまだ弱いし、市民としてのマナーや公衆道徳のほうも、これまた十年、二十年前に比べては次第によくなっているとはいえ、欧米に比べてずっと低い。

「日本人は、知り合った者どうしは極めて礼儀正しいのに、知らない者どうしは極めて不作法だ」とは外国人によってしばしば指摘される点なのだが、これはつまり日本人が意識的無意識的に「知り合った者どうし」と「知らない者どうし」をはっきり区別しているからで、上に示したように、ヨコの関係をふたつに区別したのもそのためであるに外ならないが、こうした事実の基盤にあるのが、つまり「閉鎖性」だということになる。

こうした閉鎖性は日本社会のいたるところにあるのだが、これを基盤として出来あがったのが、「われら日本人」「彼等外国人」という意識であった。考えてみれば、まさにこれがあるがために、日本人はなにかのさしせまった目標があると、それに向かって一致団結、火の玉のようになって突進して近代化をなしとげ、戦後の経済復興もなしとげたということになるのだが、しかしこの特性こそが日本人の国際化や国際交流を妨げてきた最大の障害なのであった。

二、日本文化の周期性——開放性と閉鎖性が循環する

上に述べてきた日本文化の閉鎖性に関連して極めて興味ある指摘を行なっているのは、上山春平（京都国立博物館館長、京都大学人文科学研究所名誉教授）である。昭和四十二年に発表したエッセイ「日本文化の波動」〔ENERGY〕四巻四号）のなかで、日本文化においては開放性と閉鎖性が六百年の周期で繰り返されてきたという説を述べている。すなわち上山によれば、日本が外の

文化に対する場合、みずからを外に開いて、外来文化をそのままナイヴに受け入れる時期と、外と遮断して、それまで受け入れたものを内部的に消化していく時期と、この二つが周期的に繰り返されているというのである。上山の言う二つの時期は表現を私なりに言い変えてみれば、要するに外国人および外来文化一辺倒の時期と、それらへの反発の時期ということになるのだが、上山によれば、この二つの時期は日本歴史の大きな流れのなかでは、ほぼ六百年の周期を以て繰り返され、明治以降になると、ほぼ二十年の周期を以て繰り返されてきたというのである。

たしかに日本の歴史を古代にさかのぼってみれば、中国文化の受け入れは西暦三百年頃から始まり、六百年前後にもさかんであった。聖徳太子が五九三年に摂政となつて中国から仏教を積極的に取り入れ、六百年以降、数回にわたつて遣唐使が送られている。その後、奈良、平安の時代に入ると中国文化の受け入れはますますさかんとなり、都の作り方まで唐の長安を真似たものであったが、やがて八九四年になると、菅原道真の提案によつて、

それまでさかんに遣わされていた遣唐使がこれ以後、廃止されることになった。紀元三百年からこのときまで、ほぼ六百年続いた中国文化への傾倒の姿勢はこれからあと、その逆の方向へと転換していくのだが、明治以降の歴史をみると、上山の周期説は一層よくあたっているように思われてくる。

すなわち明治の初年は文明開化の時代で、まさに欧米文明一辺倒。いわゆる鹿鳴館時代なるものもこの時期であった。ところが、明治二十年代に入ると急に国粹主義が強くなり、明治二十三年には教育勅語が發布され、明治二十七年、二十八年の日清戦争、三十七、八年の日露戦争と、明治四十年ごろまでの二十年間、いわゆる富国強兵政策の時期が続く。ところが続いて大正の末までの二十年間は、いわゆる大正リベラリズムの時代で、フランス文学、ロシア文学、そしてマルキシズム等々。他方、美術においてはセザンヌ、ゴッホ、ゴーガンらフランス後期印象派の流れ等々がどつと入りこんでいる。ところが昭和に入ると、昭和二十年までの二十年間は満州事変、日中戦争、太平洋戦争と軍国主義、国粹主義が続いた時

期であり、それが昭和二十年の敗戦とともに、たちまち一変してアメリカ文明一辺倒の時代となつたのであった。

以上、私なりの見方をつけ加えながら上山説を紹介してみたのだが、殊に明治以降になると、二十年の周期を以て、まことにキチンキチンと開放性と閉鎖性の繰り返されていることが分かる。但し、かの有名な朝鮮人大虐殺事件は、開放性が著しく強かったとされる大正リベラリズム時代の末に近い大正十二年の関東大震災の際に東京で起こつたものであるし、更に言えば明治の末に日本の植民地となつた朝鮮半島に対する政策が著しく強圧的となり、その結果としての抵抗運動（特に大正八年三月一日のいわゆる三・一運動）に対する弾圧が甚だしく強められて多くの死傷者を出したりしたのもすべてこの大正年間に起こつた出来事であるから、開放的と言つても全面的なものではない点には注意しておく必要がある。

なお上山がこの文章を書いたのは先にも記したように、昭和四十二年のことで、「自分の仮説がもし正しいとしたら、昭和二十年から二〇年たった今は、一つの曲

がり角に来ているかもしれない」とその最後で述べられるにとどまっているが、今ふりかえてみると、昭和二十年から始まつたアメリカ一辺倒の時代はたしかに昭和四十年前後で終り、四十年代が進むにつれて日本人はたちまち自信をとりもどしているのであつて、二十年の周期という事実はここにもピッタリ当てはまってくる。もっとも昭和四十年代以降といつても、外来文化をシャットアウトしているわけでは決してないのであり、外に対抗する姿勢が強く出てきた時期だということになる。

だがここでもし上山説が正しいとするならば、上に示した昭和四十年からさらに二十年たった時が昭和六十年なのだから、この頃からまた変化が起こるということになるのだが、果たしてどうなのだろうか？ 平成二年という現在の時点でもふりかえてみる限り、上山説はこの点においてもみごとにあたっていると思うのだ。すなわち、昭和四十年頃から日本人の自信はどんどん強くなつたのだが、うぬぼれもいささか強くなりすぎ、その結果、しばしば近隣の国々への配慮を忘れ、あちこちで摩擦が

ひき起こされたのであった。

なかでも最も大きいのは近隣の国々から強い抗議を受けた、例の教科書問題であり、昭和五十七、八年に起こっているのだが、ひき続いては東南アジア諸国、そしてアメリカとの間にさまざまな経済摩擦が起こり、この問題は現在なお未解決のまま続いている。

こうしてみると、昭和四十年からの二十年間は閉鎖性が次第に強まった時期、六十年からの二十年間は開放性が強められる時期だということになる。

三、対「外人」意識と対「外国人」意識

以上のように外国人および外来文化に対する日本人の意識の変動を考えるにあたって、私は漠然と「外国人」という言葉を使ってきたのだが、実は日本語にはもうひとつ「外人」ということが存在している。そして日本人の多くは自分でも全く意識せずに、このふたつの言葉をはっきりと区別して使っている。すなわち、外人（またはガイジンとカナで書く場合も多いが）という時には多くの日本人は欧米人、そしてそのなかでも特に白人を頭に

思い浮かべているのであって、欧米人以外の人々、つまり、朝鮮、韓国、中国、台湾、東南アジア、西アジア、インド、アフリカ等々の人々は外国人であっても、外人というイメージのなかには入ってこないのが普通である。いいかえれば、日本人の意識のなかでの外国人は外人と「外人以外の外国人」という二つのグループに分けられるのであり、この両者に対する感覚はこれまた微妙に異なっていて、平均的な日本人の場合、外人に対しては緊張感ないし劣等感を、そして外人以外の外国人に対しては逆に優越感ないし差別感を抱いてきたというのが実情だと思う。

ちよつと周囲を見回しても、デパートのマネキン人形は、和服売場を殆ど唯一の例外としてすべて紅毛碧眼の外人の人形であり、もろもろの商品の広告、特にポスターや通信販売のパンフレット、テレビのCMのなかには、おびただしい数の外人モデルが登場しており、東京にはニューヨーク、ロンドン等々から大勢の男女モデルが集まっていると言われる。しかし広告やCMに外人以外の外国人が登場することは殆どない。

更につけ加えれば、東京や大阪等の大都市にある数多くの英語学校では白人だけを雇うのが通例で、たとえば英語が母国語でも黒人が雇われることは絶対ないそうである。そして英語の話せる白人でありさえすれば、フランス人でもドイツ人でも優先的に雇われて英会話を教えることになるらしい。

なお東京のある大学ではひところ、毎年アメリカから何名かの大学生を招いて数か月の間、ホームステイさせ、日本についての講義を聞かせるというプロジェクトを行っていたが、事務局にとつての最大の悩みは米人学生のなかに必ず最低一名はいる黒人学生を受け入れてくれる家庭を探すことだと聞かされた。「外人だ」というから白人だと思つて引き受けたが、黒人は気味が悪いからもうごめんだ」という電話で、数日後には事務局へ帰され、それからあと、その黒人だけはホテル住まいということになり、日本における黒人への偏見はアメリカよりもずっと強いことをしみじみ体験して帰って行くのが毎年のパターンだということであつたらしい。

なお最後にもうひとつ、新聞でも報じられた数年前の

出来事について触れておくと、ボランティア活動のため、長野県松本市に滞在していた三十歳のカナダの黒人女性は、常々下宿の近所の銭湯に通っていたが、常連の中年女性たちが「気味悪いからもう来ないようにしてくれ」とその銭湯に申し入れ、黒人女性はやむなくそれに従つたのであった。しかし、あとでそれを聞いた日本人の仲間たちが承知せず、最後には市役所、公衆浴場組合が間に入って、彼女に謝罪するということでおさまつたということであつた。この事件はたまたま松本市で起こつたものなのだが、同じ出来事は異人種に馴れていない日本のなかのどこの地方でも起こり得る点に大きな問題がある。

この他、中国や東南アジアからの留学生に部屋を貸すことを渋る大家さんは非常に多く、これやあれやの体験を経たこれら留学生たちは、日本に住めば住むほど日本人の持つ閉鎖性に失望し、日本という国に絶望するのだという話は多くの研究者によって報告されている。

以上をまとめてみると、結局のところ日本人は外人に向つては、おずおずとへり下つた態度で接するのに対し、

外人以外の外国人に向かつては、極めて反発的、蔑視的な態度で接する点に特徴がある。

歴史的にさかのぼってみても同じで、さきの上山説に示されるように、日本人はそれこそ遠く古代から、外国文化への一辺倒か逆に完全なる反発かのいずれかであった。なお増田義郎によると、日本では縄文式時代においても外来文化の受け入れ方が著しく早く、しかもこうして受け入れられた新しい文化が日本中に伝播する速度は著しく早かった。ということは、当時の日本人は明らかに外来文化一辺倒の姿勢だったということになる。そしてこうした先史時代以来、日本人は自分よりも上にあると考える、人と文化に対しては極めて従属的でへり下っていたのに対し、そうでない相手に対しては強い反発と蔑視を向けるのであり、バランスのとれた、対等の立場に立つ開放的な接し方は、今までの日本人に最も欠けているものだった。

四、国際化を進めるには——三つの提案

以上、日本文化と日本人の国際化を妨げているさまざま

な特質について、はるか先史時代から古代にまでさかのぼって考えてみたのだが、それではこうしたマイナス面を克服して、国際化を進めるためには、どうすべきなのだろうか。ここではこの問題についてできるだけ具体的に考えてみることにしたい。

1、開かれた人間関係を

言うまでもなく、国際化を進めるためににより大事なのは、日本人の持つ閉鎖性を打ち破ることなのだが、これこそ「言うは易く行なうは難し」なのである。しかしよく考えてみれば、人間関係の閉鎖性を打ち破って開放的なものにしていくためには、自分の周辺の日常の人間関係を先ず開放的なものにしていくことから出発せねばならないのであって、別に自分のそばに外国人がおらず、外国人に接することがほとんどないような場合でも、少しずつ直していくことができると思う。

栃木県のある中学では先生も生徒も、廊下や校庭で出会った相手には、全く初対面で未知の相手にも大声で「こんにちわ!」と挨拶することを励行しているが、このように全く知らない相手に対しても挨拶することというこ

ど、ほんの小さいことではあるが、閉鎖性を打破するための第一歩なのだと思う。山で出会った見知らぬ相手にも挨拶するのは古くからのしきたりだが、江戸時代の江戸の下町では、見知らぬ相手でも困っているときには救ってやるというのが、江戸っ子としてのモラルであり、これは明治以降の東京の下町にもある時期まで残っていた。

こうした開かれた人間関係こそは「都市の倫理」なのであり、それがあつた時期からあと、「自分のムラ以外の見知らぬ者はよそ者として警戒せよ」という「ムラの倫理」のなかで育てられた人々の流人によって次第に変えられてきたというのが私の解釈である。私はこれを都市の「ムラ化」(ruralization)と呼んでいるのだが、とにかく、まず身近なところから、開かれた人間関係をつくるのが国際化へ向けての最も重要な第一歩だと私は考えている。

2、自分とは異なつたものへの寛容性

今述べたばかりの開放性と重なりあつてくるのだが、自分とは異質のものを受け入れる寛容性を持つことをま

ず強調したい。もともとその前に、この地球上には日本の文化とは著しく異なつた文化がいくらでも存在していることをよく知つていることがまず必要だと思う。

幕末の万延元(一八六〇)年に日本最初の遣米使節としてアメリカに渡つた外国奉行(今の外務大臣)村垣淡路守はその日記のなかで、アメリカの大統領は商人の着るような筒袖の着物に車引きのはくような、ももひきをはいて出てきたと憤慨しているが、このように自分の国の風俗習慣だけを基準にして相手を批判するといういわゆる「エスノセントリズム」(ethnocentrism)的なみかたは、さすがに現在では欧米に対してはされていない。しかし今でも東南アジアその他の開発途上国に対しては、上のごとき淡路守流の見方があいも変わらず、まかり通つていふに思われる。

そしてこうした異質のものが自分たちの集団のなかに混ざりこみ、鼻つきあわせて一緒に暮らすということに、多くの日本人はそれこそ耐えられないのであつて、なんとかそれを排除しようと試みる。同じ日本人どうしても最近あちこちに起こつているイジメなどは同じ心理的メ

カニズムから起こっているわけなのだが、この点に関してぜひともあげておきたいのは片倉もと子のあげている次の言葉である。“Accept others as others” 文中の others を strangers で置き換えてもよいと思うが、要するに「他人を他人として受け入れよ」という意味。すなわち、日本人は自分とは極めて異なった考えや宗教や行動様式を持ったひとに出会うと、なぜまたそんなにおかしな宗教を信じているんだろなどと先ず考え、それが理解できない間は相手を受け入れたがらないのだが、「よそ者のすべてを理解できなくても、よそ者はよそ者としてそのまま受け入れよ」という意味なのだ。

3、みずからの文化と歴史を知り、淡い愛郷心を最後に強調しておきたいのは、日本人と日本文化の持つ特質、長所と短所についてよく知っておくことが、なにより大事だという点である。これを可能にするためには、自分たち日本人と日本文化とをクールに観察することが出来なければいけない。

これに関連して不可欠なのは、日本の歴史、特に近隣の諸民族との関係の歴史についてよく知っておくこと。

ところに自分を置き、親に間違ったところがあればこれを批判し、諫めなければいけない。

自分のふるさとである日本や日本文化に対してもこれと全く同じであり、いつもクールに客観的に観察し、悪い点があれば自由に批判する。現在のような国際化時代には、こうした姿勢がなによりも大事なのであり、そうした意味で私は「淡い愛郷心」を提唱したいのだ。現在しばしば論議のまとなっている国歌や国旗についても、自分の文化に対するのと同じことで、あまり熱愛しすぎないこと。どんなものについても、熱狂的になりすぎると、必ず閉鎖性が生れ、国際化を阻むものとなるからなのであることを最後に強調しておきたいと思う。

(そふえ たかお・放送大学教授・国立民族学博物館名誉教授)

なかでもお隣の韓国との関係に関しては、日本がどのような方法で日韓併合を行ない、どんな統治政策を行なったかについて、先住民アイヌに対する明治以降の政策と合わせて、よく知っていなければならぬと思う。中学、高校の歴史のなかでも、はつきりと教えられるべきところなのである。

最後に触れておきたいのは、最近よく話題にされる「愛国心」ということについてだが、私自身は国としての日本ではなく、ふるさととしての日本に対する愛郷心と、自分を育ててくれた日本文化を愛する気持を持ちたいと思う。

但しこの愛郷心も、日本文化を愛する気持も決して強くなりすぎてはいけない。強くなりすぎると、すぐに熱狂的な「ふるさとナショナリズム」を生み出すことになるからで、そのために私が強調したいのは「淡い愛郷心のすすめ」なのだ。自分のふるさと文化も、いわば自分の親と同じであって、親に尊敬の念と愛情を向けなければいけないのは当然だが、親への愛着心があまり強くなりすぎると、親ベッタリとなってしまう。少し離れた